

平成28年院内集談会（2016）

No		演 者	演 題	発表日
1	総務課	西島 紀子	マイナンバー勉強会（第2回）	2016.02.25
2	産婦人科	大畠 順恵	女性のライフサイクルについて	2016.02.25
3	医療社会事業部	山代 豊	平成28年熊本地震に係る当院救護の初動	2016.05.27
4	薬剤部	西村 清孝	熊本地震 救護班における薬剤師の活動（第2班）	2016.05.27
5	看護部	田中恵美子 (HCU病棟)	熊本地震災害被災者健康支援事業に参加して	2016.09.16
6	看護部	横川 裕子 (HCU病棟)	平成27年度呼吸ケアサポートチーム（RST）活動報告	2016.09.16
7	看護部	田中 久子 (B7病棟)	抗がん剤の暴露対策 閉鎖式投与システムによる投与の実際	2016.09.16

1. マイナンバー勉強会（第2回）

総務課 西島 紀子

1. 情報の管理方式について
2. マイナンバー制度の活用について
 - 1 保険資格のオンライン化
 - 2 大規模災害時のレセプト
 - 3 全国がん登録の効率化
 - 4 医療介護情報連携
3. 事業所でのマイナンバーの収集について

2. 女性のライフサイクルについて

産婦人科 大畠 順恵

女性の健康は、女性ホルモンに大きく影響される。思春期・性成熟期・更年期・老年期、その全てにおいて、女性ホルモンに起因する病態が見られる。

思春期では、月経不順・無月経が問題となることが多い。これは、生命を維持するための防御機構として、脳がコントロールしている結果である。早期から介入することが望ましい。性成熟期では、女性ホルモン依存性疾患である子宮筋腫・子宮内膜症が大きな問題となる。低用量ピルやGnRHアゴニスト等の内因性女性ホルモンを抑制する薬剤で治療できる。更年期では、女性ホルモンの急激な減少による自律神経失調症が現れやすい。これがいわゆる更年期障害である。本来の性格や社会的要因も、更年期障害発症に深く関わる。多彩な症状を呈し、ホルモン補充療法で劇的に改善する。老年期では、骨粗鬆症が女性ホルモンと深く関連する。健康寿命をいかに長くするか、思春期からすでに予防は始まっている。

女性にとって生涯かわる女性ホルモンについて理解し、体に起こる変化とうまくつきあっていただきたい。

3. 平成28年熊本地震に係る当院救護の初動

医療社会事業部 山代 豊

平成28年4月14日及び4月16日、熊本県を中心として震度7の地震を観測した。4月16日午前1時25分の本震発生後、午前3時14分に全国のDMATに待機要請が出され、午前4時42分に鳥取県より県内DMATの派遣要請が出された。院内では4時50分より出動DMAT調整と出動準備を開始。午前5時に院内災害対策本部準備室を立ち上げ、5時20分には院長来院により院内災害対策本部が設置された。そして出動要請後わずか3時間弱の午前8時にはDMATが出動した。一方救護班に関しては午前6時15分に出動要請があり、午前11時に出動した。災害対策本部ではDMAT・救護班のバックアップを行い、第2班以降の救護班出動も速やかに対応する

ことが出来た。これらの活動が迅速にできたのは、それまでの院内外の諸訓練や連絡体制の強化などが効果的であったと考えられたが、更なる体制の強化のためには今後常設の災害対策室の設置が必要であると考えられた。

4. 熊本地震 救護班における薬剤師の活動（第2班）

薬剤部 西村 清孝

熊本県熊本地方を震源とする地震が前震は4月14日（木）21時26分に発生し、本震は16日（土）1時25分に最大震度6強、マグニチュード7.3の地震が発生しました。

鳥取赤十字病院でも救護班出動要請があり、東日本大震災の活動経験から全班に薬剤師が入り活動し、第1班は避難所アセスメントと巡回診療、第2班はd-ERUでの診療と災害対策本部の本部支援、第3班はd-ERUでの診療と往診、DVT予防啓発活動、第4班はd-ERUでの診療を行った。

薬剤師は日々の多くの患者や病態に合わせ、処方薬を監査し、また、持参薬など多様化する後発品などにも多く接しており、災害の現場でも不特定多数の患者や他の医療機関で働く場合にその経験が生きる。d-ERUでの診療や往診の際、医師と処方内容を協議し、最適な処方を限りある資源の中から選び出し、処方支援を行った。

また、災害対策本部の業務支援に関しては、救護班で活動していて必要な情報を集約し、データや書面でフィードバックを行い、刻々と変化する現場に合わせて対応していることを経験した。

5. 熊本地震災害被災者健康支援事業に参加して

HCU病棟 田中恵美子

医療救護活動は地元の医療機関に引継がれ、「高齢者及び認知症や障害のある方への避難生活による健康への影響を最小限にし、避難前の日常生活が維持できるように支援すること」を目的に健康支援事業が実施された。支援の終了を前に最終班として参加し、行政・医療者・多数のボランティア等の介入で依存的な傾向であった避難者に対して「自己管理ができ元の生活に近づいていけること」を重点に援助を行った。健康相談、内服・血圧測定などの自己管理の促進や掲示物の整備、規則的な生活を行うための日課表の修正、感染防止対策、高齢者の多い避難所では困難な簡易の風呂の掃除等を行った。

災害派遣時は「その現場」で「その時（時期）」に「何が必要か（何が求められるか）」によって支援内容が異なる。状況に応じた「目的」を明確にし混乱や日々の変化に対応しながら健康・生活を支えていくために役割の

異なる多職種がお互いを尊重し、連携をとりながら援助に当たることが重要である。

6. 平成27年度呼吸ケアサポートチーム（RST）活動報告

HCU病棟 横川 裕子

〈活動目標〉

①他職種と連携し専門知識を活かしたチーム活動の実施②呼吸器管理の標準化を図り安全な呼吸ケア管理の実施③NPPVマスク使用による皮膚障害防止対策の実施④年間計画に沿った研修会の実施⑤呼吸ケアチーム加算の取得を目的とした呼吸ケア診療計画書の作成

〈活動内容と成果〉

①患者統計：人工呼吸器装着患者数131名 平均装着日数 7.2日 離脱率 65%②人工呼吸器関連インシデント10件③NPPV装着時の皮膚保護方法マニュアル、皮膚保護材の整備④17のテーマの研修会を実施し211名参加⑤呼吸ケアチーム加算、呼吸ケアチーム診療計画書を作成

〈まとめ〉

昨年度、呼吸ケアチーム加算の取得が可能になり、算定に不可欠な呼吸ケアチーム診療計画書を作成し電子カルテ上で運用。本年度、呼吸器装着平均日数は減少したが離脱率は変わらなかった。週2回のRSTラウンドで他職種との連携を図り早期離脱に向けた活動を続けた。

NPPV装着患者のマスクや皮膚保護材の検討を行った

が発赤や潰瘍形成が多い。今後も皮膚・排泄ケア認定看護師と連携し潰瘍形成予防に取り組んでいきたい。

7. 抗がん剤の暴露対策 閉鎖式投与システムによる投与の実際

B7病棟 がん化学療法看護認定看護師 田中 久子
はじめに

抗がん剤の曝露が身体に及ぼす影響は周知である。近年、抗がん剤の職業性曝露対策について適切な取り組みが求められており、抗がん剤暴露対策閉鎖式システム（CSTD）使用も推奨されるようになった。

平成28年度診療改定ではCSTD使用時、対象薬の点数は180点と30点増になった。それに伴い当院薬剤部でもすべての抗がん剤にCSTD使用を開始し、外来化学療法のみ投与システムを用いることになったのでその方法について紹介する。

抗がん剤投与の実際

まず、抗がん剤の輸液バックにバックスパイクがついた状態で払い出される。次に第2処置室では、バックプライミングをした輸液セットのピン針にびん針接続セットを装着。

バックスパイクと接続するとルートが開通され投与が開始できる。

まとめ

抗がん剤暴露対策閉鎖式システム（CSTD）を用いることは、抗がん剤の調剤から投与までを閉鎖状態を保つことができ、抗がん剤による職業性曝露対策に有効である。